

氏名	廣瀬 麻名
ヨミガナ	ヒロセ マナ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第234号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 チャールズ・アイヴズの室内楽作品 －独自性から見た世界－ 〈演奏〉 C. Ives Violin sonata No.1、Piano Trio

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	清水 高師
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	澤 和樹
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	川崎 和憲
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	松原 勝也
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大角 欣矢

（論文内容の要旨）

本研究は、未だ日本においては知名度の高いとは言い難いチャールズ・アイヴズ（Charles Edward Ives 1874-1954）の作品、特に室内楽作品において、その作曲技術の独自性を明らかにすることと、演奏家がアイヴズ作品の演奏をする際にどのように作曲家とのコミュニケーションを取り、その演奏をより良いものにするかを明らかにするものである。

アイヴズの作品は強い独自性を持ち、西洋音楽の伝統と歴史の文脈の先駆性を持つ。アイヴズは、この先駆性を独自の音楽観によって得、日常生活と音楽を密接に結びつけることの中で、西洋音楽の緻密な基礎の上に新たな音楽を築いた。そのようなアイヴズの存在は音楽史の中で重要な存在であり、その存在を明らかにすることも本研究においてのアイヴズの独自性に対する課題である。演奏家がアイヴズの作品をより良く演奏するためには作曲家と交流をすることが良い手段となるであろうが、作曲家が存命であるとは限らない。このような時に作曲家と演奏家を結びつけるのは音であるが、アイヴズの作品のより良い演奏をするためのきっかけは、日常生活の中に存在していると言っても間違いとは言い難い。「引用」「パロディ」「コラージュ」「複旋律」「多声性」「ポリリズム」「多調性」という時代に先駆けた技法とされる要素は、日常に存在する音と、その背後にある作曲家の精神をそのまま音楽に表そうと試みる中で生まれた。そのような要素を知ることが、演奏家の演奏活動の大きな助けとなる。このような点において、アイヴズの室内楽作品であるピアノ・トリオの分析を通して研究を行う。

アイヴズの育った19世紀後半までには、アメリカ独自のクラシック音楽発展の歴史があった。植民地時代に持ち込まれたヨーロッパの音楽に始まり、それをベースにした土着の音楽が誕生し、19世紀後半にはニューイングランド学術派の音楽家たちによって、洗練されたヨーロッパ的な音楽が確立される。しかし、伝統的西洋音楽「芸術音楽」と土着の楽しみの為の「大衆音楽」は、完全に二分化したものであった。ニューイングランド学術派の一人であるホレイショウ・パーカー（Horatio Parker 1863-1919）はアイヴズの大学時代の師であり、伝統的西洋音楽の基礎と論理を教えた。

アイヴズの作品に現れる独自性の根源は、父親による音楽教育の影響と音楽的＝日常的体験である。アイヴズは父親とのレッスンで西洋音楽の作曲・演奏における、基礎と技術を学んだ。そして、その独特の音楽的実験を通して、独自の音の感覚、音と音楽への意識、音楽への姿勢として音楽に向き合う際に心の広さを保つための献身的な愛情を持つこと、「偏見のない開かれた耳と心」を保つことを教わった。

日常の中で自然に聴こえてくる音の音楽的な捉え方、ある場面での音と人々の感情の関わり、また、音楽

に対して耳を傾ける時には聴こえてくる実際の「音の響き」以上に、その背後にある精神である「音楽」を優れた大切なものとする考え、アイヴズはこれらを生涯の作曲活動の源として根底に持ち続けた。このように父親との音楽的体験はアイヴズの作曲家としての特性、人間性に非常に大きな影響を与えている。アイヴズの作品について度々取り上げられる作曲技法上の時代の先取性の要素も、これらの経験に端を発するものである。作曲の技法としてというよりは、個人的体験に基づく音楽的実験、日常の情景を音で表現しようとする試みから生まれた表現方法である。それ故に他のどの作曲家、どの時代の音楽とも似ていない極めて独特な音が、アイヴズの音楽から聴こえてくるのである。

音楽的に二分化したアメリカにおいて、アイヴズはその二分化とは一線を置いた立ち位置を取った（それ故に「日曜作曲家」と呼ばれたりもするのであるが）。西洋の伝統的な作曲技術とその音楽、アメリカ土着の大衆的であった音楽、という枠組みを超え、全てを身の周りの「音」、「音楽」として作曲に取り組んだ。その結果、新たな音楽を創り上げ、その過程で新しい技法も生まれたのである。

本研究では室内楽作品の中でも、ピアノ・トリオを分析の素材とした。トリオ2楽章は独特の「冗談音楽」の代表作とも言えるが、音による情景・心理の描写がより明確に表されている事がわかった。それと共に、時代の先駆性の要素が曲中の至る所に見出せ、それらの現れ方と表現の内容を見た時、音楽史上における先駆性とその独自性が明らかなものと言える証拠の一端となったのではないだろうか。また、演奏する者としてアイヴズの作品をみると、その人となりや作品の背後にある考えを知ることなしに演奏することは困難である。それを知り、楽譜に表された音の意味を読み取れたとき、演奏者、そして聴く人々も、新たな音楽の楽しみを得られるのではないだろうか。

#### (総合審査結果の要旨)

広瀬の研究は、チャールズ・アイヴズ（1874-1954）の室内楽作品、特にヴァイオリンソナタ、ピアノトリオ曲に光をあてようというものである。アイヴズは、アメリカに於ける、クラシック音楽の先駆者と言われる作曲家である。アイヴズの代表作品とされる後期の思想的作品（主にピアノソナタ、交響曲）に関する研究については論文も数多く発表されているが、比較的初期の作品である室内楽作品に関する研究は殆どなされていない。晩年の作品のテーマになる超越思想に関連づけた作品群がより重要視されてきたため、未だロマン主義的作曲スタイルの色合いが残っているこれらの室内楽作品が研究者から軽視されてきた経緯も否めない。世界的にみても、アイヴズのこの分野での研究は極めて少なく、その点においても意義のあるものと云えよう。当日の演奏では、ヴァイオリンソナタ、ピアノトリオ両曲とも、極めて充実した演奏を聴かせていた。アイヴズの書法に於いては、極めて複雑な作曲上のテクスチュアが常にいとも平易に語られているのである。演奏は透明感に満ちており秀逸であった。特にピアノトリオは特筆に値する演奏であり、共演者のレベルも非常に高いものであった。

論文は、しかし、問題を含んでおり、先ず、序章で当時のアメリカの音楽背景が長々と語られているものの、もう少しコンパクトにまとめて欲しい。又演奏家の視点からの実際の演奏に於ける問題点等の提起があれば、より充実した論文になりえたであろう。文献の極めて少ない状況から研究は困難を極めたであろうと想像されるが、改善の余地があるとされ、総合判定を合格とする。